
艦魂たちともうひとつの日本海軍史外伝 魚雷艇「島千鳥」型

火龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

艦魂たちともうひとつの日本海軍史外伝 魚雷艇「島千鳥」型

【Nコード】

N0318Z

【作者名】

火龍

【あらすじ】

史実において、日本は船舶用の小型で高い出力を持つ機関の製造に苦戦し、アメリカのPTボートに匹敵するような高速力の魚雷艇を安定して多数建造することが難しかった。一方勇の転移した過去では指定型船舶建造助成法の施行によって日本にも個人所有の遊覧船という存在が根付いたため、この問題は徐々に解消されていた。ところが、満を持して建造された魚雷艇はその情勢の変化によって、実に数奇な生涯を送ることとなる。本作は、「艦魂たちともうひとつの日本海軍史」外伝第二弾です。

第一話 判で押した副産物

日露戦争後に施行された指定型船舶建造助成法により、民間の船舶保有量は飛躍的に増大。そして経済的に余裕のある人間の中には、二五トン級指定船や海軍の装載艇と同型の船艇を、個人用の遊覧船として保有する例も多くなっていった。

遊覧船の増加は、特に小型で高出力な船舶用機関を製造する技術を向上させる上で、大いに役立った。史実では小型船と言えば漁船ぐらいしかなかったために、魚雷艇や魚雷艇隼艇といった高速小型艇の建造に苦戦した日本であったが、その問題が解消されつつあったのである。

そして軍縮条約期、日本海軍は成熟した国内の技術を生かした魚雷艇の建造を計画。二五トン級指定船に大馬力の機関を搭載することで、以下のような要目の魚雷艇も建造可能であると判断された。

全長一七・五メートル、幅三・五メートル、喫水〇・七メートル、深さ一・七五メートル

基準排水量二五トン、満載排水量三五トン

機関ディーゼル二基二軸、二四〇〇馬力、速力四〇ノット、燃料搭載量七・二トン

・航続距離

一〇ノット（一六〇馬力）で一九二〇海里（八日）

一五ノット（三六〇馬力）で一四四〇海里（四日）

二〇ノット（六四〇馬力）で九六〇海里（二日）

三〇ノット（一四四〇馬力）で七二〇海里（一日）

四〇ノット（二四〇〇馬力）で四八〇海里（半日）

・居住区

八名分（士官一、予備士官、下士官兵六）

・兵装

二〇ミリ単装機銃二基二門（航空機用の旋回機銃とほぼ同型。船首楼及び船橋後部）

五三・三センチ魚雷落射機二基（船体中央部左右）

爆雷八個（投下軌条二基、船尾に軌条を並列配置）

一番艇を含めた十二隻は一九三九年十月一日から各艇につき一日ずつずらして起工し、翌年二月二十八日から同じく一日刻みで進水。魚雷艇は鳥の名や鳥に関する言葉に因んで命名されることになり、一番艇の「島千鳥」を初めとして、以下の十二隻が各艇の進水した日を以て命名された。

島千鳥、菅鳥、菅根鳥、巢立鳥、田長鳥、巧鳥、黄昏鳥、橘鳥、種蒔鳥、旅鳥、千歳鳥、千鳥

さらに同時期、史実の隼艇を参考にした砲艇の建造も決定。魚雷落射機と引き換えにする形で、船体中央部の中心線上に二〇ミリ単装機銃二門を追加装備した砲艇十二隻が、進水と同日を以て以下のように命名されることとなった。

藍鯨、青鯨、油鯨、尾長鯨、神楽鯨、銀鯨、坂田鯨、蝶鯨、角鯨、猫鯨、鼠鯨、星鯨

根拠地に押し寄せる上陸船団等を主な目標とした魚雷艇と異なり、彼女たちの建造された目的は、敵小型舟艇の撃破や自軍小型艦艇の護衛であった。太平洋上の島々、特にフィリピンには米軍魚雷艇の配備が見込まれていることから、攻略に向かった艦隊が魚雷艇の攻撃を受けることも考えられるのだ。

当初は四〇ミリ機関砲の搭載も計画されたが、同じ単装でも一基当たりの重量が二〇ミリ機銃より桁違いに大きい（後者が二百キロ前後に対して後者は一トン以上）こと、また砲艇用にわざわざ四〇ミリ機関砲の単装砲架を新規設計する手間が嫌われたことなどから断念。米軍魚雷艇の船体は木製であることから、二〇ミリ機銃でも焼夷榴散弾を使えば威力に不足は無いとされた。

一九四〇年二月二十八日、横須賀海軍工廠。

「有馬中将、こちらです」

造船官の案内で勇が工廠の一角を訪れると、そこには二十四隻の小型艇が屋外に整然と並べられ、いつでも進水できる状態になっていた。とはいえ機銃や魚雷発射管等といった艤装品が搭載されていないため、彼女たちが軍用艦艇であることを示すものはその塗装ぐらいであり、形状は民間の船舶と酷似していた。

そしてまずは、スロープで海面へと降ろされた一番艇の「島千鳥」が進水。すると彼女の船首甲板が、常人には見えない閃光に包まれた。

（どうやら、ここにいる人間で艦魂が見えるのは自分だけのようだな）

進水した「島千鳥」に同乗していた造船官たちが、目の閃光に対しても何の反応も見せないのを見て、勇は改めて艦魂が見える人間の少なさを実感する。そこに、横須賀で停泊中の戦艦「三笠」艦上から様子を見ていた三笠がやってきて、勇に耳打ちした。

（有馬中将、どうします？）

（右舷側にある居室のうち、一番船首寄りの部屋が予備士官室だから、そこに連れてきてもらえる？）

（了解です）

三笠が船首楼へと向かう様子を見届けると、勇は周囲で船体の状況を確認している技官に「艇内の様子を見てくる」と言い残して、予備士官室へと先回りをする。そして数分後、三笠が「失礼します」と告げた後に、「島千鳥」の艦魂を連れて部屋に入ってきた。

第一話 判で押した副産物（後書き）

作者「確かにあらずじどおり数奇な運命ではあるけれど、ただグダグダになっただけのようないでもないと言ってみる」

富士「十話目まで書いておいてそう言うか。しかし、魚雷艇にまともな居住設備を設けられるのか？」

作者「基本的に、船体が漁船とほぼ同型ですからね。四〇ノットも速力が出せるのであれば、あとは居住性の改善や武装の強化を試みたほうが良いでしょう」

大隅「いっそ、航続距離や居住性を捨てて魚雷を四本搭載しては？
アメリカで建造された黎明期の魚雷艇を見るに、この排水量であれば不可能でもなさそうです」

作者「そうになると、汎用性が薄れたり改設計の手間が増えたりする。ネタバレになるけれど、魚雷戦専門じゃあできることが限られて結果的に寿命を縮める羽目になりかねないから、純粋な魚雷艇としての能力には多少目を瞑ったよ」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回は艦魂の登場と雷撃訓練を描きます。次回『魚雷は貴重品』ご期待ください」

第二話 魚雷は貴重品

三笠と共に予備士官室へ入ってきたのは、身長が三笠と同程度で顔立ちが幼いものの、凛々しい目と肩の辺りまで伸びた黒髪を持つ艦魂であった。

「有馬中将、お初にお目にかかります。自分が島千鳥型魚雷艇一番艇『島千鳥』です」

低いがよく響く声で自己紹介を終えると、島千鳥は機敏な動作で立礼を行う。その様子は上総に匹敵するような実直さを感じさせたが、背が小さめなこととどこかあどけなさの残る顔によって、見る者に威圧感を与えるようなものではなかった。

「ところで、我が軍で初めての魚雷艇ということになりますが……彼女の階級は何ですか？」

「軍艦ではない艦艇で構成される隊のうち、一番艇ということはまず間違いなく最も小さな番号の隊を指揮するから……兵曹長、ということになるのかな」

「しゅ、就役直後からですか？」

勇が提示した階級を聞いて、島千鳥は大きな声を上げる。彼女は自分の船体が小さいことから、自分は水兵扱いだと一人合点していたのだ。

「就役直後に連合艦隊旗艦を務める、つまり大將になることもあるから、特別なことではないよ」

「それに階級が上だからと言って、やるべきことが急激に増えるわけでもないですから」

「し、しかし……兎も角、最善は尽くします」

勇と三笠が安心させようとしても、島千鳥は目を逸らせて狼狽えるばかり。それでも根は生真面目であるので、彼女なりのせめてもの礼儀として「最善を尽くす」という言葉を使って口を濁した。それ以上の答えに窮した彼女は、どうにか話を変えようとする。

「ところで、私の姉妹艇は何処に？」

「明日から一日一隻ずつ船体を進水させて、それから順次艤装工事に移る。もう船体はほぼ完成しているから、全ての艇を一日で進水させることも不可能ではないけれど、それだとどちらが先に進水したかというので艦魂同士のいざこざの元になりかねないからね」

もしこの処置を行ったのが戦時であれば、一日でも、そして一隻でも船が欲しいであろう状況下では不合理な方策とも考えられる。しかし今は対米戦がいつ勃発してもおかしくないとはいえ飽くまで平時であり、また勇はこれまでの経験から艦魂の精神状態が船体に重大な影響を及ぼすことを承知していたので、敢えてこのようにしたのだった。

「そ、それは……確かに」

勇の考えを知った島千鳥は、彼が予想以上に艦魂のことを考えていたと知り、驚きを隠せない。

「もうこんな時間か。名残惜しいけれど、そろそろ戻らないと他の技師たちに怪しまれるな」

「そうですね……また来てくださいね」

「暫くは魚雷艇たちのを見届けるという理由があるから、ほぼ毎日来られるはずだよ」

「本当ですか？ 有り難う御座います！」

「それやあ、また明日」

「はい！」

喜色満面の三笠を見て自らも頬を緩めながら、勇は予備士官室を後にする。幸い他の部員に勇の不在を怪しむ者はおらず、勇はこの後もおよそ半月に亘って魚雷艇の進水に立ち会うとの名目で海軍工廠に通い詰め、三笠たちと話をする事ができた。

進水した魚雷艇は一カ月程度で艤装を終え、相次いで就役。駆逐艦や潜水艦と同じく四隻で艇隊を、三個艇隊で魚雷艇隊を編成し、実用性を試験した後に四隻や十二隻を一単位としての戦闘訓練が行われることとされた。

一九四〇年四月十日、横須賀沖。

「据え物切りとはいえ、初の魚雷発射……気は抜けません」

海上に浮かぶ標的艦「浅間」に向け、「島千鳥」が四十ノット近い速力で突進する。そして彼我の距離が一海里程度にまで詰まったところで、「島千鳥」の左舷に設置された蝶番型の金具が外側へと倒され、訓練用の魚雷は無事「浅間」目掛けて放たれた。

この魚雷は目標に命中するか、あるいは一定距離を走った後に停止して、魚雷内部の気室によって浮上するようになっている。これにより標的が損壊する心配も無く、また空気を充填すれば何回でも訓練に使用できるようになっているのだ。

訓練用魚雷が再利用可能であることは、日本に限った話ではない。しかし当時の魚雷の価格は史実の現代における一億円に相当するた

め、モリブデンなどといった希少な金属を使用することもある。資源や予算余裕の無い日本には他国にもまして貴重品なのである。

「三……二……一……当たりました、よね？」

島千鳥が、懐中時計で自分が放った魚雷の命中予測時刻を確認して間もなく、「浅間」から手旗信号で船底への魚雷命中を確認したことが伝えられる。それを見届けた島千鳥は安堵の息を漏らすと、予備士官室へと戻っていった。

第二話 魚雷は貴重品（後書き）

作者「因みに、現代の一億円はハーブーン一本分だそうです」

富士「時代の異なる貨幣の価値を換算すると、基準とするものによって相当な誤差が出るのは必定だが、同じく対艦攻撃を目的とする魚雷とハーブーンが同一価格だというのは偶然にしては出来過ぎているような気もするな」

作者「なお魚雷一本は首相の年俸二年分、陸海軍大将の年俸三年分をそれぞれ若干上回るとのこと」

敷島「それを基準にしたら、現代の五千万円ぐらいになりそうだけどねえ……とはいえ海軍少尉の年俸だと二十人分を超えるから、そんなものなのかなあ」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「対米開戦を迎えましたが、彼女たちの出番はなかなかやってきません。次回『特化ゆえの焦り』ご期待ください」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0318z/>

艦魂たちともうひとつの日本海軍史外伝 魚雷艇「島千鳥」型

2011年12月3日05時52分発行